

# 愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅴ —猿投窯黒笹 91 号窯跡、中世猿投窯出土重要陶片の考古学的調査—

大西 遼  
(愛知県陶磁美術館 学芸員)

## はじめに

愛知県は、古墳時代中期に国内屈指の古窯群である猿投山西南麓古窯跡群（以下、猿投窯）が開窯して以降、連綿と窯業生産を展開してきた地域である。日本全国を見ても、愛知県のように古墳時代から現在に至るまで、連綿と生産史を追うことのできる地域はない。

県下の窯業遺跡は、各時代の生産活動の様相を現代に伝えるものであり、当地の窯業史のみならず日本陶磁史の基礎資料として極めて貴重な情報を内包している。筆者は 2018 年以降、窯跡出土資料を主な対象として、実測図の作成を通じた考古学的基礎的調査の報告を行ってきた（註 1）。本稿では、令和 3（2021）年度に実施した愛知県陶磁美術館所蔵・保管資料の実測調査成果を踏まえ、報告を行う。

## 1. 猿投窯黒笹 91 号窯跡（下り松瓦窯跡）

黒笹 91 号窯跡（下り松瓦窯跡、以下「下り松瓦窯跡」と記述する）は、みよし市福谷町に所在する瓦を主体に一部須恵器が出土した窯跡である。本窯跡は、上向イ田窯跡群を除くと黒笹地区最古の窯跡であり、福谷東丘陵で最古の窯跡でもある。ただし、瓦と須恵器が同時期に焼かれたか、時期差があるのかについては意見が分かれている（註 2）。本窯の発掘調査による出土資料は豊田市に所蔵されているが、愛知県陶磁美術館保管資料の中に、少量ながら下り松瓦窯跡表採資料があり、小片であるが図化したものを報告する。

図 1-1~4 は須恵器である。1 は杯蓋で、口縁部は単純に下方へ折れ、端部断面は三角形を呈する。2・3 は杯ないし碗の口縁部である。2 は直線的に外方に開くが、3 は腰にやや屈曲部を持ち、外反して口縁端部に至る。4 は不明器種の口縁部である。5 は平底となる甕である。外面は下方に静止ヘラ削り、上方に平行タタキ痕が残る。内面は粗いナデで仕上げられる。図 7-6~11 は瓦で、6・7 は丸瓦、8~10 は平瓦、11 は隅切瓦である。6 の焼成は甘く、黄白色を呈する。凹面は摩滅により不明瞭なもの、布目がわずかに認められる。凸面は平行タタキ痕が残る。7 は焼成良好で灰色を呈する。凹面は布目がうっすらと確認でき、凸面は縦方向の板ナデが施される。8 の焼成はやや甘めで、黄白色を呈する。凹面には糸切痕と布目が確認でき、凸面には縄タタキ痕が残る。9 は焼成良好で灰色を呈する。凹面には布目、凸面には縄タタキ痕が残る。10 は焼成良好で灰色から黄灰色を呈する。凹面には布目残り、凸面は不定方向ナデにより仕上げられる。11 は焼成良好で灰色を呈する。凹面には布目、凸面には縄タタキ痕が残る。

須恵器については小片のため不明な部分が多いが、岩崎 41~岩崎 25 号窯式期（註 3）を

逸脱しない範囲と考えられる。瓦については、焼成の甘めなものもあるが、焼成が良好なものの方が多い。丸瓦・平瓦とも凹面に布目が見られる。凸面は縄タタキ痕を残すものが多いが、ナデにより仕上げられるもの、平行タタキ痕を残すものもある。

## 2. 中世猿投窯出土の重要陶片資料

ここで取り上げる中世猿投窯出土陶片は、平成8(1996)年度に愛知県陶磁美術館の所蔵となったものである(館蔵品番号A-2476、註4)。出土に関する情報の不明瞭さに問題を残す一方で、刻画文陶片をはじめとする特殊品が多く含まれ、一部類例の乏しい陶片もあることから、中世猿投窯を分析する上で貴重な情報を多く有している。しかし、これまで展覧会や図録等への写真掲載例が一部あるが、資料群の全貌把握や、実測図等を用いての詳細な分析がなされていなかった。今回、当資料群に対し行った実測等調査成果を報告するとともに、類品の検討を踏まえて本資料の中世猿投窯研究における位置づけについて考える。

### (1) 資料の提示

当資料群は、「猿投古窯跡出土陶片一括」という名称で登録されており、個体数としては13点ある。一部の資料は接合不可能な陶片のため、1個体につき数点で構成される資料がある。猿投窯で出土したということ以外は、一部の陶片について出土地と思われる墨書きが残されている以外に、資料群全体の出土に関する情報は伝来していない。

当資料群を器種別に分類すると、瓶類、小形壺、大形壺・甕、不明器種、瓦に大別でき、以下、順に資料の内容を記述する。

なお、中世猿投窯を含む中世初期の窯業地で用いられる文様に、いわゆる三筋文があり、施文方法により複線・単線・櫛目文のものがあるが(註5)、本稿でもこの三筋文の呼称を用いることとする。三筋文系陶器として捉えられている器種については、二筋や四筋の場合にも三筋文の呼称が慣用句的に用いられているため、本稿でも二筋の資料の場合は三筋文と呼称する。ただし、一筋のものは古代以来、日本陶磁にたびたび見られるもので、これを含むと中世前期に特徴的な三筋文系陶器の境界があいまいになる可能性が考えられたため、本稿では一筋のものについては単に沈線文と表記する。

### A. 瓶類

瓶類では水瓶と平底瓶がある(図2-1~3)。

図2-1は水瓶である。肩がやや張った卵形の胴部に絞られた口頸部が付くもので、口縁外面は面取りされ、内面はくぼんで受け口状となる。頸部外面中位には複線の沈線文が施される。胴部は内面が回転ナデ、外面が回転ヘラ削りにより仕上げられ、肩部と頸基部の境には外面に段差が認められ、内面には指頭痕が認められる。口頸部内外面は、回転ナデにより仕上げられる。以上から、肩部まで粘土紐輪積みで成形し、肩部に粘土を足して口

頸部までを水挽成形しているものと考えられる。なお、外面に残る肩部と頸基部の境の段差は、粘土紐の接合により生じた隆起を利用して、回転ナデにより仕上げられており、一種の装飾的効果を生んでいる。径 2 mm以下の白色砂粒をまばらに含む密な胎土で、器面には長石の吹き出しがわずかに見られる他、黒色斑点が認められる。焼成は良好で、器面は褐灰色から暗褐灰色を呈する。肩には火表側を中心に自然釉が認められる。

図 2-2 は平底瓶である。平底から半球形を描くようになで肩に至り、口頸部は外反して端部には凹線が巡る。肩部には単線の沈線文が施される。胴部から口頸部は内外面とも回転ナデにより仕上げられ、頸基部から肩部にかけて粘土紐の接合痕跡は認められない。胴部外面の底部際には、工具があたったのか沈線状の痕跡がある。底部には離れ砂が認められる。径 1 mm以下の白色砂粒を微量含む密な胎土で、器面には黒色斑点が認められる。焼成は良好で、器面は灰白色を呈する。上面に自然釉がかかる。本体に「植田三七ヶ原 53. 11. 5.」の注記がある。

図 2-3 も平底瓶である。図 2-2 の平底瓶よりも胴長なプロポーションで、平底の底部からやや銅張の胴部、なで肩へと至り、頸部はやや内湾した後外反し、口縁部で外反を強め、端部は丸みをもって面取りされ、内面には凹線が巡る。肩部には複線の沈線文が施される。胴部外面は横方向の板ナデが施され、肩部から口頸部の内外面は回転ナデにより仕上げられる。頸部内面には粘土紐の接合痕跡が認められる。底部外周には半周程段があり、轆轤からの切り離しの際の痕跡と考えられる。胴部外面の底部際には、工具があたったのか沈線状の痕跡がある。底部接地面は薄く剥落しており、調整等の詳細は不明である。径 3 mm以下の白色砂粒をまばらに含む、ややざんぐりとした胎土で、器面には黒色斑点が認められる。焼成は良好で、器面は灰色を呈する。肩及び口縁内面に降灰が認められる。本体に「植田三七ヶ原 53. 11. 5.」の注記がある。

## B. 小形壺

図 2-4~6 は小形の壺である。

図 2-4 は外反する頸部から口縁部に向けて強く外反し、端部は縁帯状に仕上げられ、内面は凹線状となる。頸基部には鈍い凸帯が巡る。全体に回転ナデにより仕上げられるが、頸基部内面には粘土紐の接合痕と指頭痕が認められる。径 1 mm以下の白色砂粒をまばらに含むやや粗い胎土で、器面には長石の吹き出しがわずかに見られる他、黒色斑点が認められる。焼成は良好で、器面は黒褐色、断面は灰色を呈する。

図 2-5 は壺として分類したが、頸基部径がやや狭く、瓶類となる可能性も否定できない。肩部には単線及び複線の沈線が二段に施されている。外面は胴部が回転ヘラ削り、肩部が回転ナデ、内面は回転ナデにより仕上げられる。径 3 mm以下の白色砂礫を比較的多く含む粗い胎土で、器面には長石の吹き出しがわずかに見られる他、黒色斑点が認められる。焼成は良好で、外面は褐色、内面及び断面は褐灰白色を呈する。肩部に自然釉がかかる。

図 2-6 は高台を持つ壺で、四耳壺となる可能性もある個体である。やや外反する断面長

方形の貼付け高台を持ち、肩部には単線の沈線が施される。底部内面には指頭痕が残り、外面は粗いナデにより仕上げられる。胴部から肩部の外面は回転板ナデ、内面は回転ナデにより仕上げられる。径 2 ミリ以下の白色砂粒をまばらに含む、ねっとりしているがやや粗い胎土で、器面には長石の吹き出しが多く見られる他、黒色斑点も比較的多く認められる。焼成良好で、外面は褐灰白色、内面及び断面は灰白色を呈する。肩部は半周程残存するが、その全てに緑色の灰釉層が認められ、火前は高台接地面まで大きく釉垂れが生じる。

### C. 大形壺・甕

大形の壺には、突帯付四耳壺、突帯付壺、刻画文突帯付壺、甕がある（図 2-7・8、図 3-9、図 4-10）。

#### (ア) 突帯付四耳壺・甕

図 2-7 は突帯付四耳壺である。胴部に断面M字形の鋭い突帯を持ち、欠損しているが本来は図 2-8 のように、胴部に計二条の突帯が付いていたものと考えられる。突帯のすぐ上、肩部には、粘土紐を二つ束ねた耳が貼り付けられる。耳は一つが完存し、少し端の残る耳がもう一つ確認でき、この二つの位置から復元すると四耳となる。頸基部には低い突帯が巡り、頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部は外反し、端部面取り気味に仕上げられ、断面形が三角形を呈する。胴部から肩部は、外面が回転ナデにより仕上げられ、内面が粗い横ナデにより仕上げられるが、粘土紐の接合痕が残る。口頸部は内外面とも回転ナデにより仕上げられる。頸基部内面には、粘土接合時の段差が認められる。径 2 mm以下の白色砂粒、径 8 mm以下の白色礫をまばらに含む粗い胎土で、器面には長石の吹き出しと黒色斑点が認められる。焼成は良好で、器面は褐色から暗褐色、断面は灰白色を呈する。口縁部から胴部の外面には自然釉がかかる。

図 2-8 も突帯付四耳壺である。突帯は、一辺がやや凹む断面台形を呈するもので、胴部に二条巡らされている。頸基部は外面に小さな段ないし凹みが三段巡り、頸部は内傾した後、直立するものとみられる。肩部につけられた耳は全て欠失しているが、三耳は基部のみ残存しており、その位置関係を踏まえると四耳壺と確定できる。耳基部の様子からは、図 2-7 と異なり、粘土紐一本による平耳が付けられていたものと考えられる。肩部の耳の付く位置に沈線が巡らされているが、沈線の真上から付けられた耳もあり、装飾的効果を完全に否定するものではないが、一種の耳貼り付け位置の目印的な意図も考慮するべきだろう。胴部は外面が回転板ナデ、内面が横ナデで仕上げられ、内外面に所々粘土紐の接合痕が認められる。肩部は外面が回転ナデ、内面が横ナデにより仕上げられる。頸部は内外面とも回転ナデにより仕上げられる。頸基部内面には顕著な段差が見られ、肩部まで製作したものに別作りの口頸部を乗せる形で接合されている。底部内面には指頭痕が認められ、接地面には植物の茎と考えられる痕が数か所認められる。砂粒をあまり含まない密な胎土で、器面には黒色斑点が少し認められる。焼成は自然釉がかかるほどではないが良好で、淡黄褐色から灰白色の焼き上がりである。灰釉が良好に融解していない場合、ハケ塗や浸

け掛け、流し掛けのような施釉痕はむしろ判別しやすいが、本器の肩部には施釉の痕跡が全く認められず、同一器種の図2-7の外面上に見られる釉層も自然釉であることが追認できる。

図4-10は突帯付壺である。図2-7・8のように突帯文四耳壺となる可能性もある。胴部にやや端部の鈍い、断面M字形の突帯が巡る。外面は突帯より下が回転板ナデ、突帯及びその上はゆるい回転ナデにより仕上げられる。内面は粗い横ナデにより仕上げられ、所々に粘土紐の接合痕が認められる。径二以下の白色砂粒を比較的多く含み、残存部に径1cm以下の白色礫を五つ程含むやや粗い胎土である。長石の吹き出しが少しあり、器面には黒色斑点が認められ、吹き出た部分も少し認められる。焼成は良好で、灰白色から灰色を呈する。突帯の上部に降灰が認められる。

図4-11は甕である。頸部は内傾の後大きく外反して口縁部へと至り、端部は外側が面取りされ縁带状となり、端部内面は凹んでやや受口状となる。口頸部内外面は基本的に回転ナデにより仕上げられ、下方は一部内外面とも指頭痕が認められる。肩部内面には指頭痕が認められる。頸基部内面には凹みがあり、頸基部の上下で調整の様子に差があることから、肩部まで製作した後、別作りの口頸部を乗せる形で接合されている。径2mm以下の白色砂粒をまばらに含む密な胎土で、長石の吹き出しが少し見られ、器面には黒色斑点が認められる。焼成は良好で、器面は黄褐色、断面は灰白色を呈する。

### (イ) 刻画面突帯付壺

図3-9は刻画面突帯付壺で、肩の張った器形を持ち、胴部に段面M字形の鋭い突帯が二条巡る。頸部は内傾しつつ立ち上がり、口縁部で大きく外反し、端部は断面が半矩形となる形で面取され仕上げられている。頸基部には、上下に鈍い沈線を巡らせることで、相対的な低い突帯を付けられている。胴部から肩部の内面は横ナデにより仕上げられるが、所々に粘土紐の接合痕が認められる。胴部外面は、下段突帯より下が回転ヘラ削り、上段突帯と下段突帯の間が回転ヘラ削りの後回転ナデにより仕上げられる。肩部外面は回転ナデにより仕上げられる。口頸部内外面は回転ナデにより仕上げられる。径二ミリ以下の白色砂粒をまばらに含む密な胎土で、器面には黒色斑点が比較的多く認められる。焼成は良好で、灰白色から灰色に焼きあがる。肩部に降灰があり、一部釉化が認められる。

本器の最大の特徴である刻画面は、上段突帯より上の肩部と、上段突帯と下段突帯の間の大きく二段の区画に施されている。上段が絵画的な動植物文、下段が文様の唐草文というように、刻画面の内容も異なっており、ここでは前者を上段文様帯、後者を下段文様帯として分けて記述する。なお、本器の陶片は可能な限り接合したが、最終的に接合しない三つの塊の状態であり、ここでは便宜上三つの塊を陶片A～Cと呼称することとする。実測図の作成には、最も全形を捉え得る残存状況だった陶片Aを使用した。なお、陶片A～Cは、器形、器厚、焼き上がり、文様の連続性等の共通性から同一個体の陶片であることが確実なものである。

上段文様帯は、更に詳細に見ると、複線沈線により更に上下二段の区画を認知でき、上段に蝶文・蜉蝣（かげろう）文が描かれ、上段と中段をまたぐ形で草花文が描かれている。草花文は陶片A・Bに描かれており、下方に葉があり茎が伸び、枝分かちして複数の花が描かれ、その先に蔓が巻くという構成は共通している。しかし双方の草花文には、葉、茎、花の表現に差がある。葉に着目すると、陶片Aでは一本の線で弓なりの細長い葉が描かれるのに対し、陶片Bでは雲形状の幅広の葉が描かれている。茎に着目すると、陶片Aでは茎が複線で描かれ太さが表現されているのに対し、陶片Bでは茎が単線で描かれ細く表現されている。花に着目すると、双方の陶片とも草花文の全形が残存していないため不確定な部分があるが、陶片Aでは花の中心に円を描き、その周りに丸みのある花びらを五～六枚描くことで一つの花が表現されている。一方、陶片Bでは陶片Aと基本的に共通する表現だが、一つの花に描かれる花卉の数は、残存部に描かれているものに限って五枚のみである。花卉の枚数は、書き手の誤りや、枚数までそろえる意思を持っていなかった可能性もあるが、陶片A・Bで葉・茎に表現の違いが見られたことを踏まえると、花びらの枚数も描き分けられていた可能性も否定できない。以上、草花文は二種の植物を描き分けている可能性が高いと考えるが、具体的な植物名は不明である。

次に蝶文と蜉蝣文であるが、陶片Cの上段文様帯に蝶文が描かれており、体を前屈させ、羽根を広げて羽ばたいている様子が描かれ、頭部につく先端の巻く触角の表現が特徴的である。一方陶片Aには、先ほどの草花文の右側に蜉蝣文が描かれており、前後に分かれた細長い羽根の表現から陶片Cの蝶文とは明らかに描き分けられている。蜉蝣ではなく蜻蛉（とんぼ）である可能性も想定したが、腹部後端に二本の尾毛が表現されており、蜉蝣の可能性が高いと考えられる。ただし、意図的に蜉蝣と蜻蛉を描き分けた可能性と、漠然と蜉蝣・蜻蛉のような昆虫を描いた可能性、いずれも考えられる。

最後に下段文様帯に描かれた唐草文だが、実測図に示した陶片Aや写真を掲載した陶片B、本稿で下段文様帯を掲示しなかったが陶片Cの唐草から、左向きの偏行唐草文と理解できる。一本の主幹を描いてから枝を描くような表現ではなく、蕨手状の単位を反転しながら連ねることで構成されている。唐草の枝の先端は、それぞれ二股に分かれることを基本としている。なお、陶片Bには唐草の始点と終点にあたると考えられる部分が描かれるが、大きく目立つ表現上の処理は見られない。ただし始点側の三枝の先端と、枝分かち基部の一か所に葉ないし蕾のような表現がなされている。また、始点と終点側各一か所ずつ、枝先端が二股にならない箇所がある。

下段の偏行唐草文は、複線によりやや硬い筆致で深めに文様が刻まれている。これは先に見た上段の動植物文が、比較的軽めでのびやかな筆致で描かれているのとは対照的である。やや飛躍した解釈かもしれないが、下段文様帯が形式的な文様構成である唐草文、上段文様帯が絵画的な動植物文というように、異なる画題を描いていることを考え合わせると、上段・下段で文様の描き手が異なっていた可能性も考えられる。

#### D. 不明器種・瓦

図 4-12 は不明器種である。内面には降灰が認められず、外面に降灰が認められ一部釉化していることから、天地は図化した通りの向きとなる。残存部はスカート形に広がり、残存部上方の様子からは内面側は中央に向けて伸びるようで、外面側は外側に向けて伸びるようである。端部直上には断面三角形の大きな突帯が巡り、縁帯を形成する。残存部の中位には、端部直上と同様の三角形の大きな突帯が巡る。端部直上突帯から中位突帯の間、及び中位突帯の上の区画に、1~1.5 cm程の感覚で縦位の沈線文が放射状に刻まれる。二条の突帯の外側には、外径 7 mm、内径 4 mmの竹管文 2~8 mmの間隔で連続して施される。内外面とも回転ナデにより仕上げられる。径 2 mm以下の白色砂粒をまばらに含む密な胎土で、器面には黒色斑点が認められる。焼成は良好で、灰白色から灰色を呈する。

図 4-13 は軒平瓦である。瓦当文様は中心飾りを持たない均整唐草文だが、瓦当文様の凹凸はあまり顕著ではない。顎部断面は台形を呈する。平瓦部凹面は横方向に筋が連続して認められ、糸切痕と思われる。顎部は横ナデにより仕上げられ、平瓦部凸面にはタタキ痕が不明瞭である。平瓦部側面は面取りされる。瓦当面を中心に黄緑色の自然釉がかかり、瓦当面を上にして焼成されたことがわかる。径 2 mm以下の白色砂粒をまばらに含む密な胎土である。焼成は良好で、器面は褐色から暗褐色、断面は灰白色を呈する。

#### (2) 関連資料との比較検討

前章で資料の提示を行った愛知県陶磁美術館所蔵の中世猿投窯出土陶片について、ここでは窯跡及び消費地遺跡出土品、出土地不詳の資料も含め、猿投窯産の作例に限定して、関連資料との比較検討を行う。

なお、中世猿投窯の編年については、最も基本的な器種である椀・皿類を軸としたものに限定すると、檜崎彰一（註 6）、齊藤孝正（註 7）、藤澤良祐（註 8）らの研究が挙げられる。藤澤良祐の研究を参考に、本稿に関連のある部分に絞って、三者の編年区分及びおよその実年代を対照すると、以下のようになる。

- ① H-G-105 号窯期：第Ⅶ期第 1 型式：尾張型第 3 型式：11 世紀末~12 世紀前葉
- ② H-G-61 号窯期：第Ⅶ期第 2 型式：尾張型第 4 型式：12 世紀中葉
- ③ NN-G-65 号窯期・H-G-101 号窯期：第Ⅶ期第 3 型式：尾張型第 5 型式：12 世紀後葉~13 世紀初頭
- ④ 第Ⅷ期第 1 型式：尾張型第 6 型式：13 世紀前葉

本稿では、以下記述の煩雑さを避けるため、中世猿投窯の編年における時期を記述する場合には、先述の①の時期をⅠ期、②の時期をⅡ期、③の時期をⅢ期、④の時期をⅣ期と仮に表記する。

#### A. 水瓶・平底瓶

水瓶（図 2-1）の水瓶の位置づけをめぐり、中世猿投窯出土の水瓶のいくつかを見てみ

たい。まず、出土窯跡の明確な資料としては、黒笹G-44号窯跡出土品(図5-14:みよし市歴史民俗資料館蔵)、折戸G-1号窯跡出土品(図5-15:愛知県陶磁美術館蔵)、岩崎G-26号窯跡出土品(図5-16・17:日進市教育委員会蔵)がある。また、名古屋市天白区黒石付近出土の水瓶(図5-20:名古屋市博物館蔵)も窯跡出土品とされるものである。

図5-14の黒笹G-44号窯跡出土品は、Ⅱ期に比定されている(註9)。口縁部が外反し口縁端部内面を凹ませている点、頸部中位に複線沈線が施される様子等、図2-1と共通する要素を持つが、口縁部の外反度合いや、端部内面の凹み具合にやや差異がある。折戸G-1号窯跡出土品(図5-15)はⅡ期に比定されているが(註10)、頸基部に断面三角形の大ぶりの突帯が巡る点で図2-1とは異なる。岩崎G-26号窯跡出土品(図5-16・17)はⅣ期に比定されているが(註11)、図5-16は頸基部に施された突帯に刺突文が付けられており、図5-17は胴部に複線三筋文が配されており、図2-1とは異なるデザインである。なお、頸基部に明瞭な突帯を巡らせたり、突帯に刺突を施したりする作例は、常滑窯の水瓶に比較的多く見られるものである(図5-18・19:愛知県陶磁美術館蔵(鯉江良二氏寄贈、館蔵品番号A-6184・6183)(註12))。

名古屋市天白区黒石付近出土品(図5-20)は、中世猿投窯の窯跡出土品として捉えられている作例で(註13)、出土地点は猿投窯の地区区分では鳴海地区に相当する。伴って採集されたとされる椀・小椀・小皿は、Ⅱ～Ⅲ期に比定できるもので(図5-21～26:名古屋市博物館蔵)、この地点に時期差のある複数の窯が存在していた可能性があり、図5-20の水瓶がどれに伴うものかは定かでない。図5-20の水瓶は断面三角形の低めの高台を有し、なで肩の卵形の胴部から、境界の不明瞭な頸基部を経て口頸部に至る形が図2-1に類似する。しかし、図2-1に比べ胴部に対する口頸部が短く、口縁端部は内傾する面取りがなされる形態も異なる。また、頸部中位の複線沈線は共通するが、図5-20には肩部にも同様の複線沈線が引かれ、確実に三筋文として捉え得る点にも差異がある。

ここまで中世猿投窯の水瓶の諸例を見てきたが、図2-1と形態上の要素が確実に一致するものを求めることができなかつた。しいて言うならば、胴部の形は図5-20に近く、口縁部の形態はやや差が大きい、図5-14に方向性としては類似する。図5-20の名古屋市天白区黒石付近出土品の時期はやや広く見積もらねばならないが、図5-14の黒笹G-44号窯跡出土品はⅡ期の資料である。水瓶ではなく、複線三筋文の段数も異なるが、Ⅱ期に比定される東山G-61号窯跡出土の水注も(註14)、口頸部の形態が類似し、特に口縁端部の形態は図2-1と類似する(図5-27:愛知県陶磁美術館蔵)。

以上の点から、図2-1の水瓶はⅡ期を中心とする時期の所産と考えられる。また、中世猿投窯の水瓶は、出土数として決して多い器種ではないが、ここで見たようにバリエーションに富んだ形態を持つ。図2-1もこのバリエーションの幅を広げる資料であり、中世猿投窯の水瓶を評価する上で重要な資料である。

さて、平底瓶(図2-2・3)については、類例として八事裏山1D号窯跡(東山G-86号窯跡)出土品を挙げることができる(図5-28:荒木集成館蔵)。平底でなで肩の胴部、肩

の複線沈線が共通するが、やや差異も認められる。図 2-2 と図 5-28 では胴部形態が類似する一方、口頸部の形態に差異が認められる。図 2-3 と図 5-28 では、口頸部の形態が類似する一方で、図 2-3 はかなり胴長な器形である点が異なる。

平底瓶の類例についても、図 2-2・3 と形態にやや差があったが、平底瓶は先の水瓶以上に中世猿投窯で出土数の少ない器形である。現状としては図 5-28 が出土した八事裏山 1D 号窯跡の時期（I 期）（註 15）とほぼ同様と考えて大過なからう。図 2-2・3 は中世猿投窯の平底瓶の形態的バリエーションを考える上でも重要な資料となる。

## B. 小形壺類

図 2-4~6 の小形壺類は、残存部分が限定的で類例を検討しづらい。図 2-5 は肩部に単線と複線の沈線文を二条、図 2-6 も肩部にのみ単線の沈線文が施されており、同様に肩部にのみ沈線文の施された壺の例として、京都市南部の鳥羽離宮金剛心院跡の地鎮遺構で出土した猿投窯産の壺（註 16）が挙げられる（図 6-32：京都市蔵・京都市指定文化財）。本器と比較的類似した口縁部を持つ二筋壺や、二筋の三筋文四耳壺が東山 G-101 号窯跡から出土しており、当窯の時期である III 期の所産と考えられる（註 17）。

図 2-6 は高台を有しており、図 6-32 と比較すると、図 2-6 が断面長方形の比較的高い高台を有するのに対し、図 5-3 は断面三角形の高台を有しており、差異が見られる。図 2-6 に比較的近い断面長方形の高台は四耳壺に見られ（図 6-29・30）、図 2-6 の肩部が欠失していることもあり、四耳壺となる可能性は想定しうる。ただし、図 6-29 は複線の三筋文四耳壺（註 18）（出土地不詳：愛知県陶磁美術館蔵、館蔵品番号 A-468）、図 6-30 は複線二筋の三筋文四耳壺（八事裏山 1C 号窯跡（東山 G-85 号窯跡）：荒木集成館蔵）であり、単線沈線が一段のみ施される図 2-6 とは異なる。なお、図 6-30 が出土した八事裏山 1C 号窯跡は III 期に比定されている（註 19）。単線の四耳壺としては図 6-31（出土地不詳：名古屋市博物館蔵）があるが（註 20）、二筋の点で異なり、高台が欠失しているため直接的に比較が難しい。

以上、小形壺類について類例を求め比較検討を行ったが、確実な類品を見出すことができなかった。ただし、東山 G-101 号窯跡と同時期と考えられる鳥羽離宮金剛心院跡例や八事裏山 1C 号窯跡例から、概ね III 期に猿投窯で製作されたことは疑いなかろう。

## C. 大形壺・甕類

次に大形壺として突帯文四耳壺・突帯文壺の類例を見てみる。

突帯文四耳壺（図 2-7・8）の類例として、図 6-33 や図 7-34 がある。図 6-33 は、III 期に比定される鳴海 302 号窯跡（荒池下 2 号窯跡）出土品である（註 21）（名古屋市教育委員会蔵）。耳は基部から欠失するが、粘土紐一本による平耳が付くものと考えられ、耳の形状は図 2-8 と共通する。ただし、突帯については図 6-33 の断面形は M 字形であり、やや差異もある。図 6-33 の突帯や口頸部の形状は、図 2-7 と類似するが、図 2-7 は粘土紐

を二つ束ねた耳を持つ点で差異がある。なお、出土地不詳のため、時期比定にやや難がある資料だが、図 2-8 と耳・突帯の形状が共通する例として図 7-34 がある（註 22）（愛知県陶磁美術館蔵、館蔵品番号 A-1679）。

突帯文壺については、図 4-10 が小片のため、残存率が高く、全形がある程度把握できる図 3-9 の類例を求めてみる。ただし、図 3-9 の刻画文については次節で検討をすることとし、ここでは形態的特徴のみに着目して検討する。図 7-35 は土岐市妻木町の大性院裏山経塚出土品である（註 23）（大性院蔵・土岐市指定文化財）。図 3-9 よりは肩の張りが弱いが、比較的肩の張る器形である。口縁部の外反度合いに違いはあるが、端部外面を面取りし、内面をやや凹ませる口作りは図 3-9 と共通する。胴部の突帯も端部の鋭さに差異は認められるが、断面M字形を呈する点は共通する。その他、図 7-35 には下段突帯の下に更に複線の三筋文が二段配されている点が図 3-9 とは異なるが、総じて両者の器形的共通性は高い。このような突帯文壺は東山 G-61 号窯跡や東山 G-101 号窯跡等の出土事例から（註 24）、Ⅱ～Ⅲ期の時間幅で生産されたものと捉え得る。

最後に図 4-11 の甕については、9 基の窯体から構成されⅡ～Ⅲ期に比定され鳴海 319 号窯跡（島田古窯跡群：出土品は名古屋市教育委員会蔵）（註 25）や、Ⅳ期に比定される岩崎 G-26 号窯跡（註 26）（出土品は日進市教育委員会蔵）で類品が出土していることを付記しておく。

#### D. 突帯付壺に施された刻画文をめぐって

中世猿投窯における刻画文陶器の数例と比較し、図 3-9 の刻画文突帯付壺の刻画文を検討してみる。図 8-36 は出土地不詳だが、器形から経塚での出土が確実な経筒外容器である（愛知県指定文化財、愛知県陶磁美術館蔵、館蔵品番号 A-349）。刻画文は、身の胴部に施された複線三筋文により区画された上段に描かれ、画題は牡丹文である。この牡丹文に類似する陶片が東山 G-105 号窯跡から出土していることが知られ（註 27）、Ⅲ期の代表的な作例である。牡丹の花を繋ぐ茎は複線によるもので、文様区画を超越しない点は、図 3-9 の下段文様帯に施された唐草文と共通するが、図 8-36 の方が明らかに手慣れた筆致で描かれている。

次に図 8-37 は、Ⅲ期に比定される八事裏山 1D 号窯跡（東山 G-86 号窯跡）で出土した三筋文四耳壺で（荒木集成館蔵）（註 28）、複線三筋文で区画された二段の文様帯には宝相華文が施されている。茎が複線により描かれている点、文様区画を超越しない点は、図 3-9 の下段文様帯の唐草文と共通するが、やはり図 8-37 の方が明らかに手慣れた筆致で描かれている。

図 8-38 は、Ⅲ期に比定される鳴海 339 号窯跡（細口下 C 号窯跡）で出土した三筋文四耳壺で（註 29、名古屋市教育委員会蔵）、三筋文により区画された二区画を超越する形で、垂下する藤文が描かれている。絵画的で手慣れた筆致は、図 3-9 の上段文様帯の動植物文と類似する。

図 8-39 は、Ⅲ期に比定される八事裏山 1A 号窯跡（東山 G-83 号窯跡）で出土したもので（註 30、荒木集成館蔵）、突帯文壺ないし突帯文四耳壺の陶片で、全体は垂下しつつも、華が頭をもたげる様子で宝相華文が描かれている。図 3-9 の下段文様帯の唐草文と比較すると、茎が単線で描かれる点が異なり、図 8-39 の方が明らかに手慣れた筆致で描かれている。また、図 8-39 の宝相華文は、突帯による文様区画を超越して描かれていることに特徴がある。

図 8-38・39 で見られるような、文様区画を超越して描かれた刻画文と関連して、荒川正明が興味深い考えを述べている。荒川は、中世陶器の刻画文全体の変遷をまとめる中で、12 世紀初頭に壺類に導入された沈線区画内施文パターンが、12 世紀中葉以降 3 系統に分かれていくとしている。一つ目は区画帯内に文様を展開させる従来の型であり、二つ目は肩部区画帯に加え胴部に施文空間を拡大させた型、三つ目は区画帯にとらわれずに施文される型であるという（註 31）。

荒川の系統区分によると、図 8-38・39 は三つ目の系統である区画帯にとらわれずに施文される型だが、これを踏まえて改めて図 3-9 を見てみる。図 3-9 の上段文様帯と下段文様帯はそれぞれの区画帯を超越しておらず、荒川の系統区分だと区画帯内に文様を展開させる一つ目の系統と言える。一方、上段文様帯に目を移すと、上段文様帯は既に述べてきたように複線沈線により更に二つの小区画帯に分かれている。描かれる動植物文の内、蝶文と蛸文は区画内に収まるが、草花文は小区画帯を超越しており、この点は荒川の系統区分の三つ目、区画帯にとらわれずに施文する例と解することができる。

すなわち図 3-9 は、各文様区画への文様配置の点で見ると、下段文様帯は図 8-36・37 に見られる区画帯内に施文する系統、上段文様帯は図 8-38・39 に見られる区画帯にとらわれずに施文する系統に分かれており、双方の系統の折衷型と捉え得るものである。また、上段文様帯と下段文様帯で筆致が異なることや、形式的な文様構成である唐草文と絵画的な動植物文という、異なる画題が描かれていることを先に述べた。ここで見た文様区画への文様配置の点を加味すると、飛躍した解釈と先述した上段・下段で文様の描き手が異なっていたという考えも、あながちの外れな解釈ではないのかもしれない。

### （3）小結

以上、愛知県陶磁美術館所蔵の中世猿投窯出土陶片について、考古学的な基礎的調査の結果を記述し、関連資料をもとに各資料の位置付けについて、限定的ながら考えてみた。これまで知られてこなかった中世猿投窯の製品もいくつか見られ、特に図 3-9 の刻画文突帯文壺は、中世の刻画文陶器を考える上でも重要な作例だと考えている。本稿では、比較検討する関連資料を中世猿投窯の製品に限ったが、今後猿投窯外の中世窯の製品、あるいは古代の資料との比較検討が課題である。

当資料群については、具体的な出土に関する情報の不明瞭さに問題が残ることを述べたが、既述のように図 2-2・3 には「植田三七ヶ原」の注記があり、少なくともこの 2 点は

名古屋市天白区の植田三七川原窯跡の出土品と考えられる（註 32）。また、図 4-13 の均整唐草文軒平瓦と同文の軒平瓦が、植田三七川原窯跡でも知られており（註 33）、本器も植田三七川原窯跡出土品である可能性が高い。

中世猿投窯で生産された屋瓦は、鳥羽離宮東殿跡をはじめ京都での出土が特徴的であることがこれまでに指摘されている（注 34）。滋賀県米原市の沖合に位置する湖底遺跡である尚江千軒遺跡で、中世猿投窯産の瓦が採集され（註 35）、猿投窯産の瓦の流通経路の一つとして、東山道—琵琶湖—大津—京都というルートが想定されている（註 36）。更に、先の米原市沖合の尚江千軒遺跡の北側に隣接する、朝妻沖湖底遺跡の近年の調査で、植田三七川原窯跡及び図 4-13 の軒平瓦にかなり類似する文様を持つ資料が採集されており（図 9-41）（註 37）、今後の中世猿投窯産瓦の流通研究の上でも、図 3-13 は重要な資料である。

以上に述べた図 2-2・3、図 4-13 以外の資料については、残念ながら具体的な出土窯跡に関する情報が無い。ただし、当資料群は本稿で見たように、Ⅰ～Ⅲ期に比定しうる資料で構成され、当該期に当資料群の出土内容に近いものを生産しているエリアは、猿投窯内でも東山地区と鳴海地区に偏在している。植田三七川原窯跡は猿投窯の地区区分だと岩崎地区に位置するが、岩崎地区でも東山地区と鳴海地区に隣接する岩崎地区西端に位置している。そのため、図 2-2・3、図 4-13 以外の資料が、植田三七川原窯跡の出土品であったとしても、さして問題はない。いずれにせよ、当資料群がⅠ～Ⅲ期にかけて、猿投窯東山・鳴海地区を中心とするエリアで生産されたことは、确实視して良からう。

最後に、不明器種とした図 4-12 については、全く類例を見出すことができなかったが、残存状況から考え得る上部の状況を想定すると、本器が何かしらの器種の脚部となる可能性か、あるいは経筒外容器等の蓋となる可能性が考えられる。前者については、中世にそのような形態の器種が存在するのかどうか不明だが、後者の装飾性の高い猿投窯産の経筒外容器の蓋は、名古屋市博物館蔵の経筒外容器（図 9-40：出土地不詳）（註 38）等で見ることができる。ただし、図 4-12 とはやはり差が大きく、類例探しが今後の課題の一つである。

## おわりに

以上、猿投窯黒笹地区の黒笹 91 号窯跡、及び愛知県陶磁美術館所蔵の中世猿投窯出土の重要陶片資料（館蔵品番号 A-2476）について、調査報告を行った。

黒笹 91 号窯跡は、黒笹地区開窯の契機となった窯としてこれまでも重要視されてきたが、瓦・須恵器の焼成時期等をめぐっては研究者によって意見の相違がある。本稿で紹介した資料は、表採資料であり、小片のみのため、本窯の大局的な評価を左右するものではないが、今後本窯の分析をする上で参考になるものと考えている。隅切瓦の存在も確認され、当窯で製作された瓦のバリエーションを考える上でも貴重である。

中世猿投窯出土の重要陶片資料（館蔵品番号 A-2476）では、類例に乏しい器種・器形・文様の個体が多く含まれていることが確認できた。特に刻画文を持つ突帯付壺は注目され

る資料で、中世猿投窯でも刻画文の陶片を出土する窯跡は限られる上、窯跡及び消費遺跡出土品で本窯の刻画文と同種の文様を持つ資料は現状知られていないと思われる。突帯を挟んで上下で異なる主題（草花・蛭蝸文と唐草文）を描いている点も極めて珍しく、貴重なものである。本稿では、断片的に他資料との比較を通して分析を行ったが、今後は猿投窯、及び他の中世窯の生産品も含めて、より詳細な分析・考察を行う必要がある。

#### 謝辞

本稿執筆にあたり、下記の方々・機関に御協力・御助言いただきました。末筆ながら深謝申し上げます。

青木修、荒木正直、井上喜久男、井上隼多、岡村弘子、片桐妃奈子、永井邦仁、中川永、中嶋茂、西澤光希、新田和央、野澤則幸、荒木集成館、京都市文化財保護課、大性院、名古屋市教育委員会、名古屋市博物館

#### [註]

(1) 大西遼 2018「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅰ－猿投窯東山地区及び尾北窯篠岡地区出土須恵器・瓷器の考古学的調査－」『愛知県陶磁美術館 研究紀要』23 愛知県陶磁美術館。大西遼 2019「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅱ－猿投窯東山地区及び尾北窯出土須恵器・瓷器の考古学的調査」『愛知県陶磁美術館 研究紀要』24 愛知県陶磁美術館。大西遼 2020「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅲ－猿投窯東山地区出土瓷器の考古学的調査」『愛知県陶磁美術館 研究紀要』25 愛知県陶磁美術館。大西遼 2021「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅳ－猿投窯黒笹・東山地区出土須恵器・瓷器の考古学的調査」『愛知県陶磁美術館 研究紀要』26 愛知県陶磁美術館。

(2) 井上喜久男 2010「第2章 古代の猿投山西南麓古窯跡群」『新編 三好町誌』資料編 考古 みよし市。井上喜久男 2015「30 K-91号窯（下り松瓦窯）」『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系 愛知県。大橋勤 1982「愛知県西加茂郡三好町下り松古窯址について」『学校紀要』6 愛知県立猿投農林高等学校。尾野善裕 1993「猿投窯黒笹地区の成立と瓦生産－下り松瓦窯の操業時期をめぐって－」『三河考古』第5号 三河考古刊行会。神谷久雄・森鋼一・大橋勤・伊藤昌・沢田樹・他 1968『猿投町誌』猿投町誌編集委員会。永井邦仁 2010「139 K-91号窯（下り松瓦窯跡）」『愛知県史』資料編4 考古4 飛鳥～平安 愛知県。

(3) 本稿では古代猿投窯の編年について、以下の文献の編年を使用した。

愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系 愛知県。

(4) 愛知県陶磁資料館学芸課『愛知県陶磁資料館所蔵品図録』Ⅱ 愛知県陶磁資料館 1998。

(5) 檜崎彰一 1978「初期中世陶における三筋文の系譜」『名古屋大学文学部研究論集』LXXIV 名古屋大学文学部。

- (6) 檜崎彰一 1984「日本出土の宋元陶磁と日本陶磁」『国際シンポジウム 新安海底引揚げ文物 報告書』中日新聞社。
- (7) 齊藤孝正 1988「中世猿投窯の研究－編年に関する一考察－」『名古屋大学文学部研究論集』C I 名古屋大学文学部。
- (8) 藤澤良祐 2007「第1章 総論」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県。
- (9) 浅田員由・安田幸市 1984『八和田山古窯跡群発掘調査報告書』三好町教育委員会。青木修 2007「K-G-41～45号窯跡」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県。
- (10) 檜崎彰一・齊藤孝正 1980『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告』(I) 愛知県教育委員会。青木修 2007「O-G-1号窯跡」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県。
- (11) 伊藤聡 1994『岩崎(I)-G-26号窯発掘調査報告』日進町教育委員会。青木修 2007「I-G-26号窯跡」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県。
- (12) 大西遼 2016「鯉江良二氏寄贈常滑コレクション(I)」『愛知県陶磁美術館研究紀要』21 愛知県陶磁美術館。
- (13) 名古屋市博物館 1982『館蔵品図録』I 名古屋市博物館。
- (14) 檜崎彰一 1961「東山古窯址群」『愛知県知多古窯址群』愛知県教育委員会。青木修 2007「H-G-61・79号窯跡」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県。
- (15) 荒木実 1981「八事裏山1号窯発掘調査報告」『古代人』38 名古屋考古学会。荒木実 1983「八事裏山1号窯第二次発掘調査報告」『古代人』41 名古屋考古学会。荒木実 1984「八事裏山1号窯第三次発掘調査報告」『古代人』43 名古屋考古学会。荒木実 1986「八事裏山1号窯第四・五次発掘調査報告」『古代人』47 名古屋考古学会。荒木実 1987「八事裏山1号窯第六次発掘調査報告」『古代人』48 名古屋考古学会。青木修 2007「H-G-83～86・88・91」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県。
- (16) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002『鳥羽離宮跡I 金剛心院跡の調査』財団法人京都市埋蔵文化財研究所。
- (17) 井上光夫・浅田員由・他 1973『H-101号古窯跡発掘調査報告』名古屋市教育委員会。佐野元 2007「H-G-101号窯跡」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県。
- (18) 愛知県陶磁資料館 1988『愛知県陶磁資料館所蔵品図録』愛知県陶磁資料館。
- (19) 前掲註15。
- (20) 前掲註13。
- (21) 尾野善裕・川合剛 1992「NN302号窯」『NN302号窯・NN304号窯発掘調査報告書』名古屋市教育委員会。青木修 2007「NN302号窯跡」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県。

- (22) 前掲註 4。
- (23) 井上喜久男 2007「重要資料解説 猿投 突帯文壺」『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』愛知県。
- (24) 前掲註 14・17。
- (25) 服部哲也 2003「NN319 号窯群」『尾張元興寺跡（第 10 次） 伊勢山中学校遺跡（第 10 次） 津賀田古墳 戸田遺跡 NN319 号窯群』名古屋市教育委員会。青木修 2007「NN319 号窯跡」『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』愛知県。
- (26) 前掲註 11。
- (27) 檜崎彰一 1976『日本陶磁全集 9 瀬戸 美濃』中央公論社。
- (28) 前掲註 15。
- (29) 三渡俊一郎 1989『昭和・天白区の考古遺跡』名古屋市教育委員会。池本正明・他 1999『細口下 1 号窯・鴻ノ巣古窯・高針原 1 号窯』愛知県埋蔵文化財センター。佐野元 2007「NN339 号窯跡」『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』愛知県。
- (30) 前掲註 15。
- (31) 荒川正明 1988「中世陶器における刻画文の系譜とその特質」『美術史』第 123 冊 美術史学会
- (32) 名古屋考古学会 1981「名古屋市内窯址出土の中世瓦一名考会古瓦展によせて一」『古代人』第 38 号 名古屋考古学会。
- (33) 前掲註 32。
- (34) 柴垣勇夫『東海地域における古代中世窯業生産史の研究』真陽社 2003。
- (35) 滋賀県立大学林博通研究室編 2004『尚江千軒遺跡 琵琶湖湖底遺跡の調査・研究』滋賀県立大学人間文化学部林博通研究室。
- (36) 柴垣勇夫 2016「第三節 窯業生産にみる中世への動き」『愛知県史 通史編 1 原始・古代』愛知県。
- (37) 中川永・大西遼 2021「『朝妻沖湖底遺跡の調査成果と基礎的検討』」『人間文化』50 号 滋賀県立大学人間文化学部。
- (38) 前掲註 13。

[図出展]

図 5-14 (註 9 文献〈青木修 2007〉)、図 5-15 (註 10 文献〈青木修 2007〉)、図 5-16・17 (註 11 文献〈青木修 2007〉)、図 5-18・19 (註 12 文献)、図 5-27 (註 14 文献〈青木修 2007〉)、図 8-37・39 (註 15 文献〈青木修 2007〉)、図 9-41 (註 37 文献)、図 4-13 の 3D 画像 (井上隼多氏製作)、そのほかの実測図・拓本・写真は筆者作成。



図1 黒笹 91 号窯跡（下り松瓦窯跡）（愛知県陶磁美術館保管）

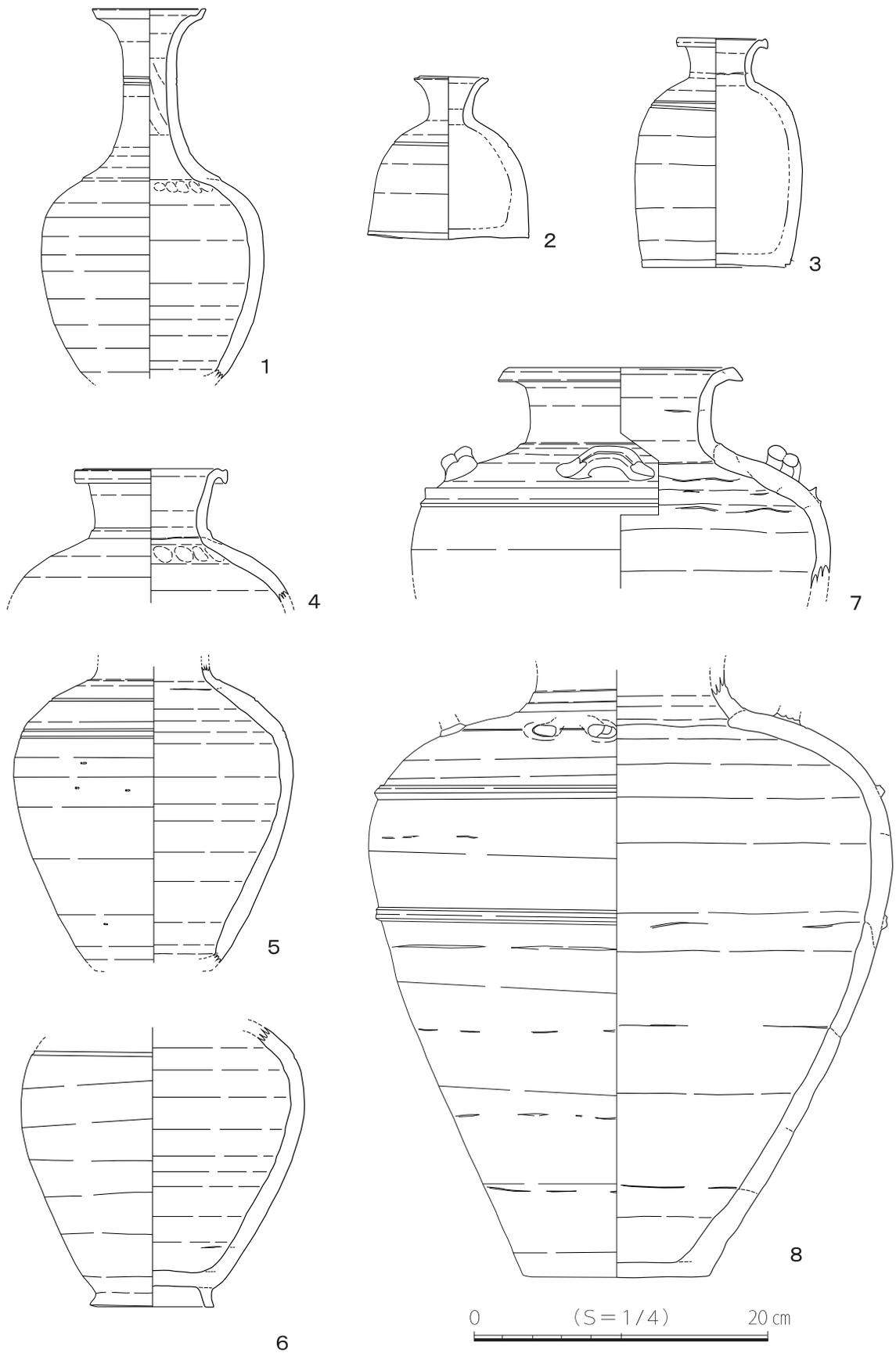
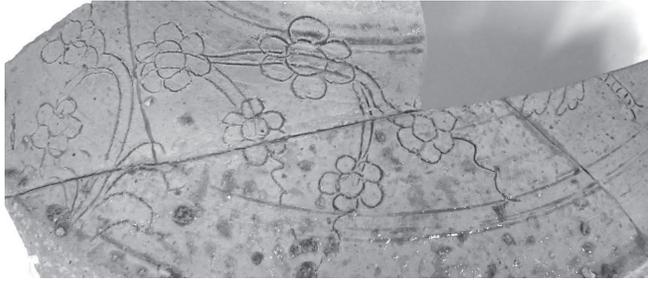


図2 愛知県陶磁美術館蔵の中世猿投窯出土陶片①(館蔵品番号 A-2476)



【陶片 A 上段文様帯】



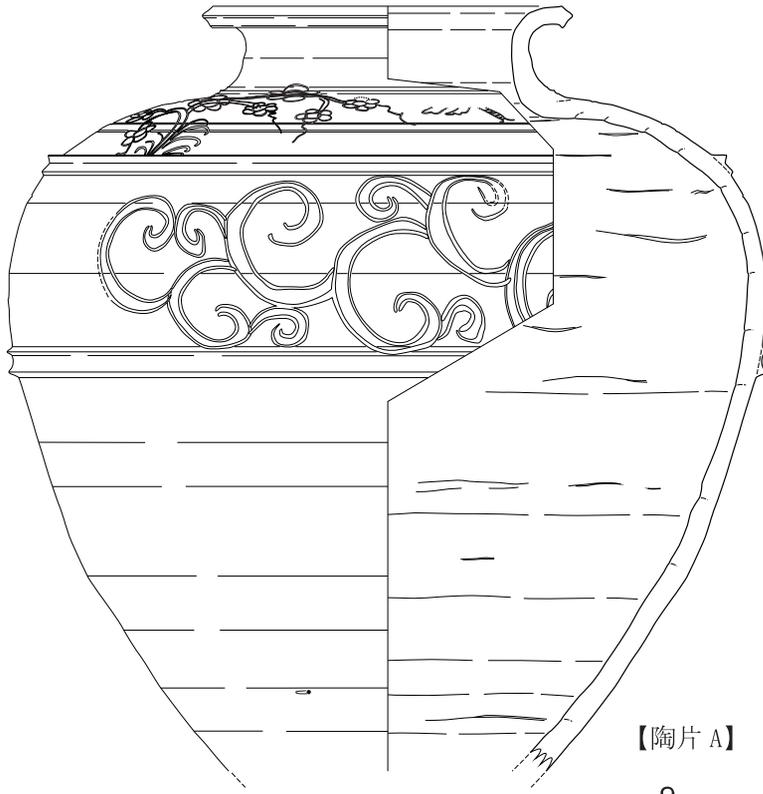
【陶片 B 上段文様帯】



【陶片 A 上段文様帯の蜻蛉文】



【陶片 C 上段文様帯の蝶文】



【陶片 A】

9

0 (S = 1/4) 20 cm



【陶片 B 下段文様帯】

図3 愛知県陶磁美術館蔵の中世猿投窯出土陶片②(館蔵品番号 A-2476)

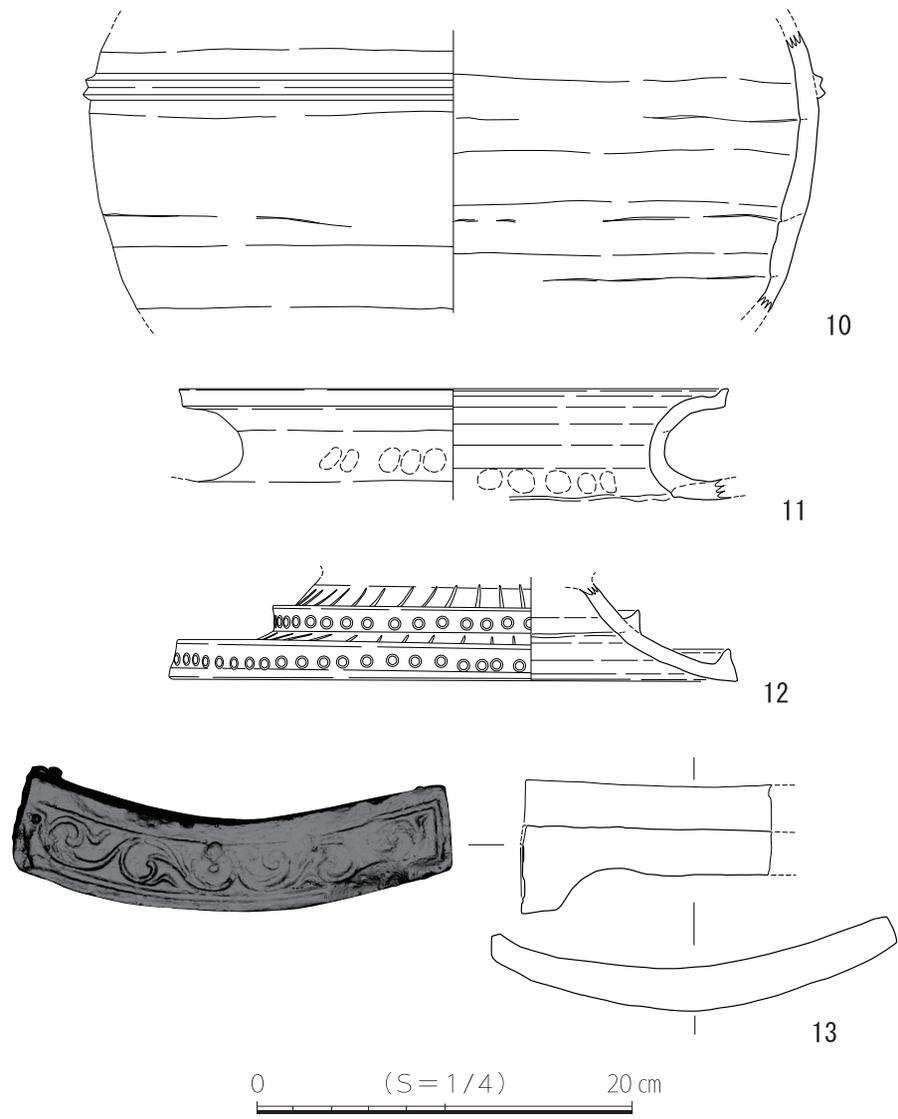


図4 愛知県陶磁美術館蔵の中世猿投窯出土陶片③(館蔵品番号 A-2476)

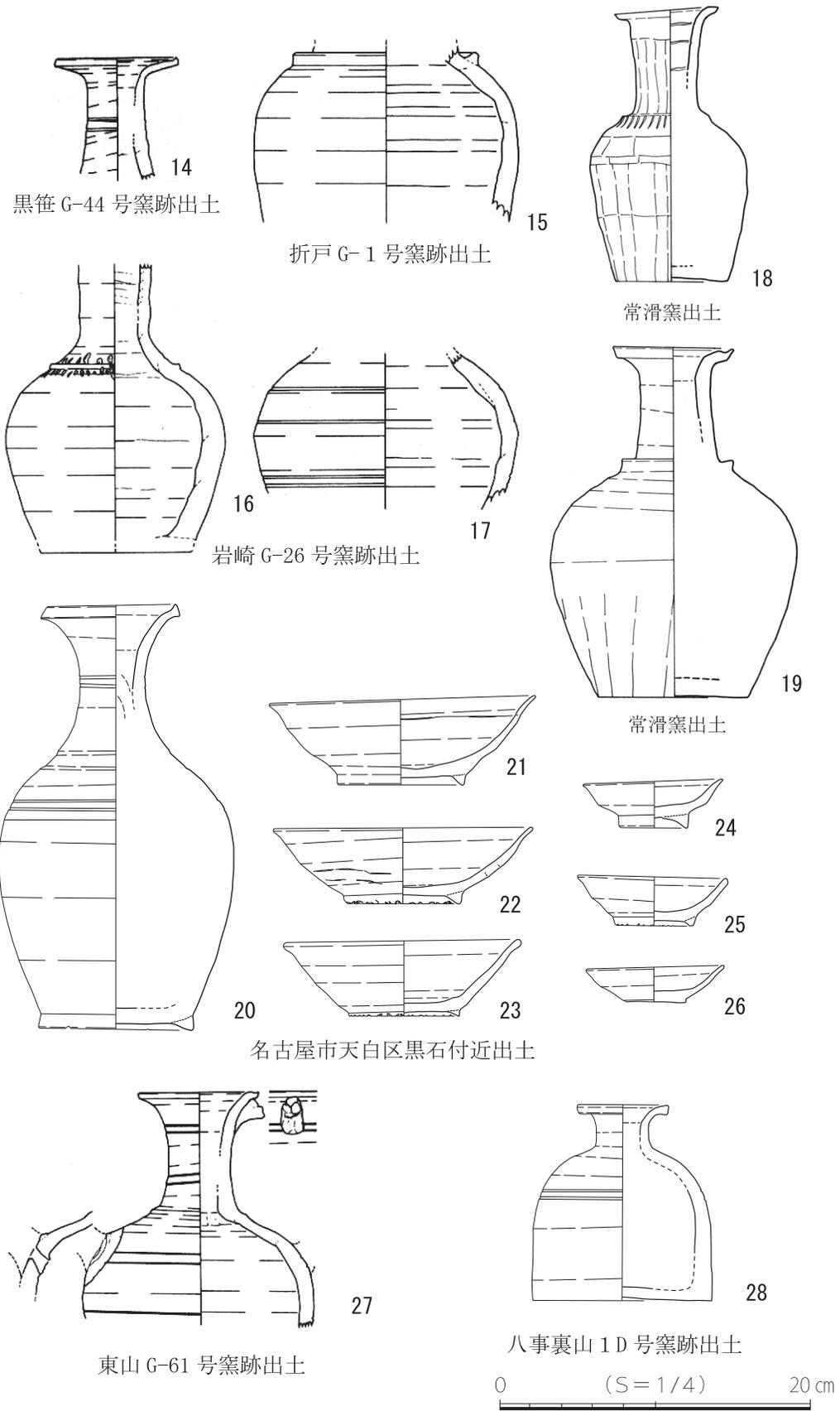
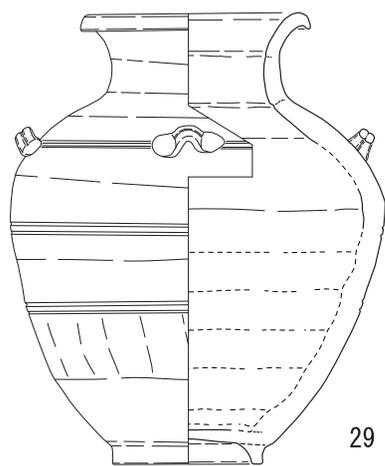
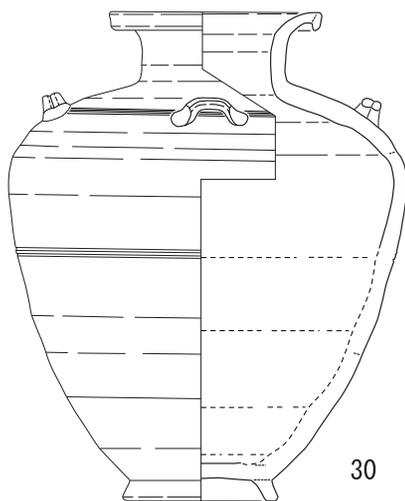


図5 瓶類関連資料



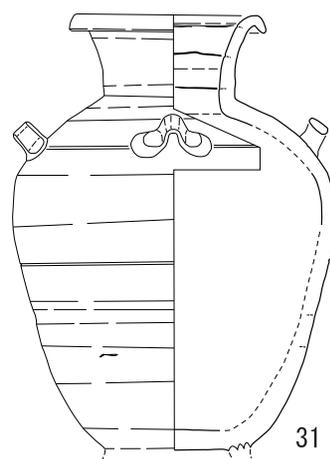
29

出土地不詳



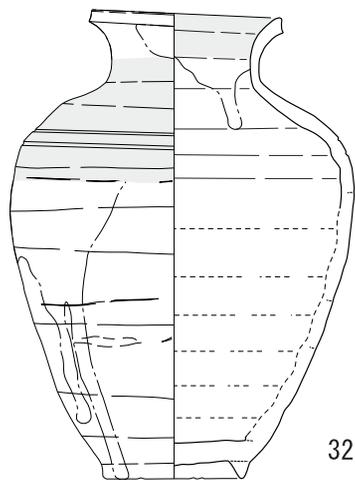
30

八事裏山1C号窯跡出土



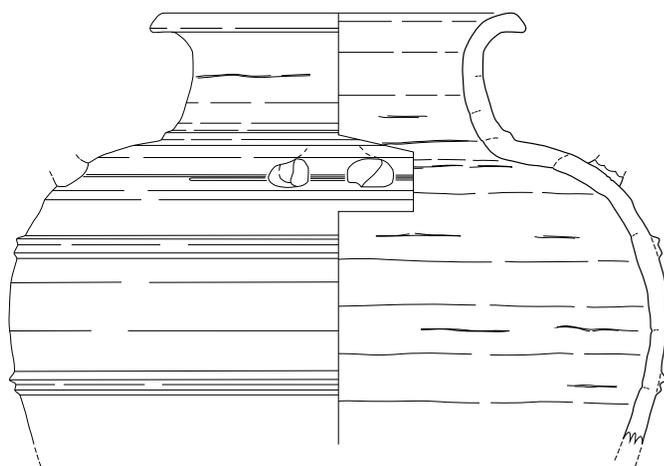
31

出土地不詳



32

鳥羽離宮金剛心院跡地鎮遺構出土

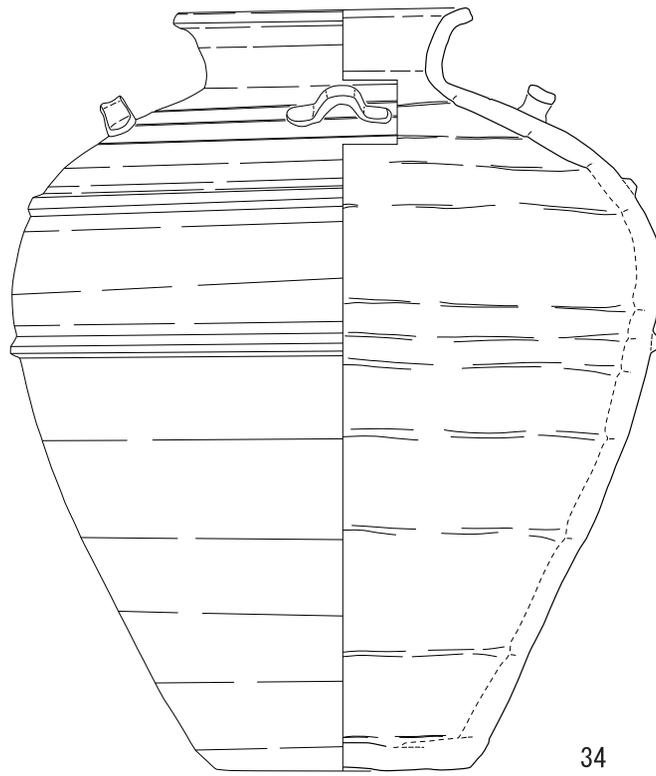


33

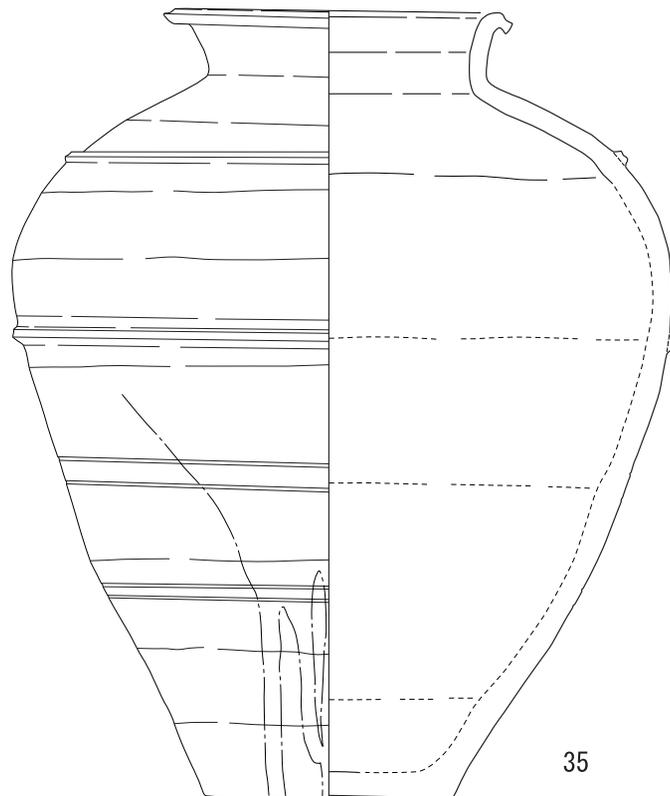
鳴海 302 号窯跡出土

0 (S = 1/4) 20 cm

図6 壺類関連資料①



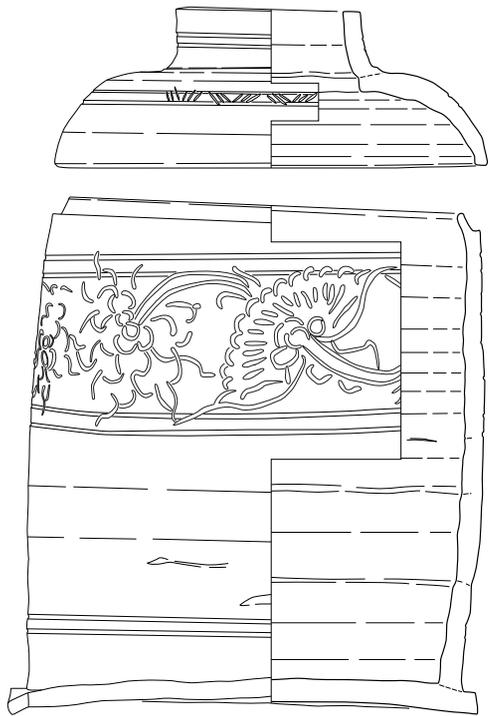
出土地不詳



大性院裏山経塚出土

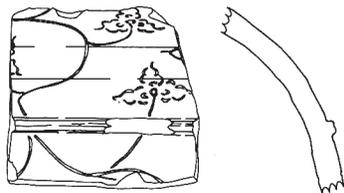
0 (S = 1/4) 20 cm

図7 壺類関連資料②



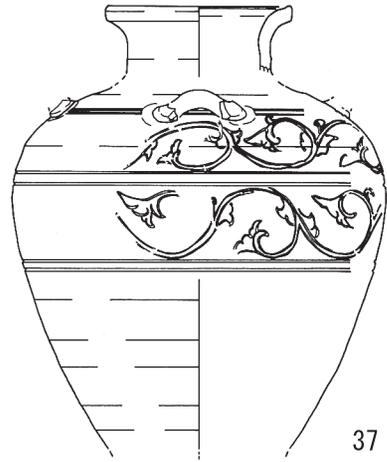
出土地不詳

36



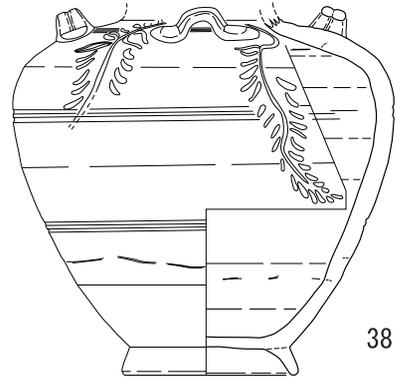
八事裏山1A号窯跡出土

39



37

八事裏山1D号窯跡出土

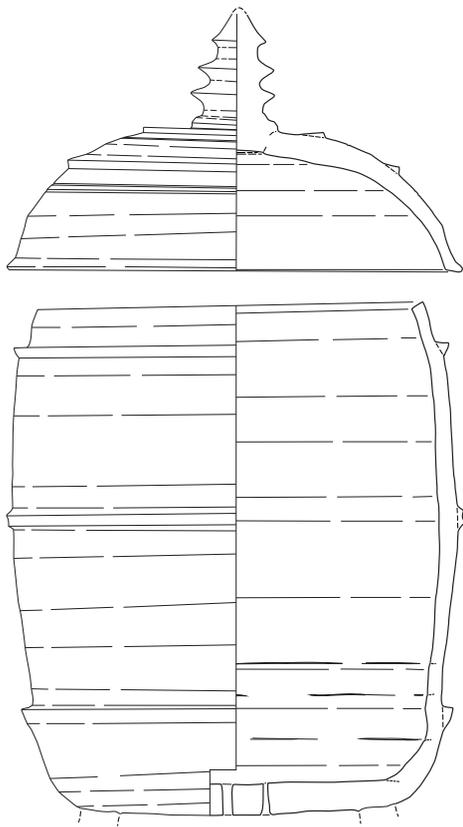


38

鳴海339号窯跡出土

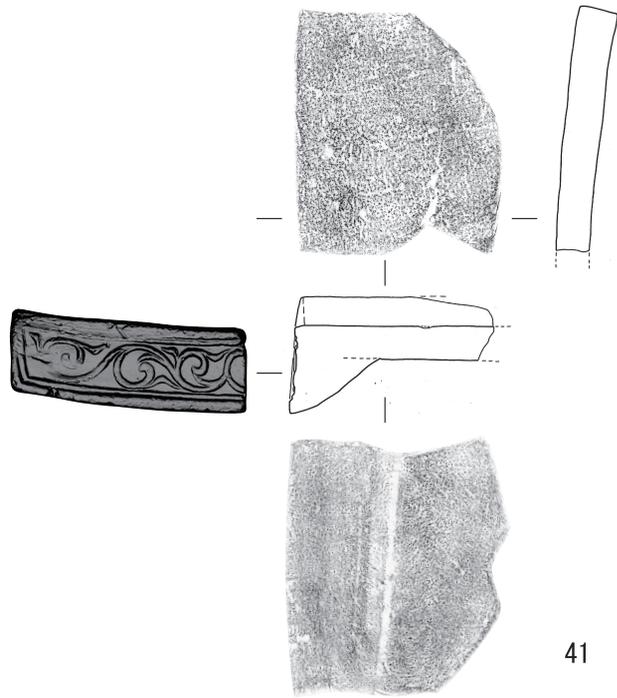
0 (S=1/4) 20 cm

図8 刻画文関連資料



出土地不詳

40



41

朝妻沖湖底遺跡出土

0 (S = 1/4) 20 cm

図9 その他関連資料